



# Artists Interview

日本財団DIVERSITY IN THE ARTS アーティスト・インタビュー

Tatsuya Hasegawa (DanceCompany DAZZLE / Dancer / Choreographer)  
Choreographer of "Seek the Truth"

「Seek the Truth(真実を求めて)」を振付 長谷川達也(ダンスカンパニー・DAZZLE (ダズル)/ダンサー/振付師)

## 長谷川 達也

ダンスカンパニーDAZZLE主宰、ダンサー、演出家、振付家。DAZZLE代表作「花ト囃」は2010年韓国SAMJOKOアジア演劇祭招聘、2011年シビウ国際演劇祭招聘、2012年ファジル国際演劇祭招聘(及び4部門ノミネート、2部門において受賞)など、海外のダンス・演劇界からの評価も高い。2013年には舞台「ASTERISK」にて総合演出・主演を務め、2014年再演。2015年3月、歌舞伎俳優の坂東玉三郎氏が総合演出を務め長谷川が振付を担当したDAZZLE主演舞台「バラレ」で新たな境地へ。昨年10月にはダンス界では初めてのマルチエンディング方式を取り入れたDAZZLE 20周年記念公演「鱗人輪舞(リンド・ロンド)」(キョードー東京主催)を上演。そして21年目を迎える本年8月にはDAZZLEが20年間制作してきた作品の要素を再構築し、新たな挑戦をした体験型公演、イマーシブシアター「Touch the Dark」の企画・演出・振付を考案、好評を博し10月末に再演が決定。チケット発売スタートからおよそ90分で即日完売するなど業界内外から注目を集めている。

3月23日から25日までシンガポールで開催された「アジア太平洋障害者芸術祭 True Colours Festival」インドア・スタジアムのオープニングで披露された作品「Seek the Truth(真実を求めて)」を振付した長谷川達也さんへのインタビューを行いました。障害のある方とともに作品を作った過程やそこで感じたことなどを語っていただきました。

## ―障害のある人と一緒に作品を作るにあたって、最初はどうに考えていましたか？

最初にオーディションとワークショップがあった時に、参加するメンバーにどのような人たちがいるのか応募資料をまとめていただきましたよね。車いすの方であるとか、手に障害があるとか、音が聴こえない、聞こえづらいとか、精神面に障害があるというように、いろんな障害種別の方がいたので、どんな振り付けをすればいいのだろうか、正直思いました。いろんな人たちができる踊りがいい、たとえば車いすの方だったら足を使わなくてもできる踊りがいいんじゃないか、聴覚に障害のある人は、手話ができるので指を使った動きがいいんじゃないか、そういったことを織り交ぜた作品にすれば面白いのではないかと思います。

## ―それはアーティストとして、これまでと違った可能性を見出そうとされたのですか

作品の中で彼らが際立つような作品にしたいなというイメージをもっていました、アジア太平洋障害者芸術祭の演出側からハイエナジーで日本的な作品をオープニングでやってほしいという依頼があったので、みんなでまとまって見せられる作品がいいのかなと思、今回のかたちになりました。

## ―ダンスは絵画とは違って、人間同士が向きあいながら一緒に作品を作っていくところが良いですね。舞台芸術作品は人と人が関わらないとできない、人との繋がりを作ることによってこれまで作品を作られてきた中で、ご自身の考えや思いを聞かせてください。

ステージで踊るといふ時点で必ず人と関わらないといけないので、それが一人であろうと何人であろうと、踊る時に音響や音楽がどうであるとか、照明がどうであるとか、ステージに立つまでにいろんな人と関わらないとステージに上がることすらできません。そう考えると、それまでにコミュニケーションを取らないといけないですし、作品の共有をしっかりと行ってないと良いものができなくなるので、人との繋がりはしっかり意識しないといけないと思います。特にDAZZLEは9人でやっていますので、体格も違う、性格も違う、価値観も違う、そういった人たちが集まって同じ踊りをするというのは、すごく難しいことなんです。でも、それを1つの踊りに合わせていく作業って、感覚を共有していくことになるし、意識を同じ方向に向けていくことになるんです。普通に生きていたらそこまですることもないし、それぞれの考えで生きてはいけるんですけど、それだとダンスでは揃わないので、ショーとしてはダメ、作品としてもダメとなるんです。みんなが同じ方向に向いて、この作品はどういうことを表現したいのかということと共有してから実際に表現しないと、伝えたいものが違ってしまっているので、それをまとめていく作業を行うと、今度はすごいエネルギーになるんです。今までダンスを作ってきて、“一体感”が持つエネルギーのすごさというものは体験してきました。そのエネルギーを出せるようにしていくことが本当に大事ですし、それがないと作品の強度が低くなっていくので。人と繋がっていくことは必要だと思います。

## ―障害のある人が対象でしたが、DAZZLEのメンバーがそれぞれ違うように、自分以外の違う人の中で作品を作るということでは、障害は関係なかったかと思えますね。

そうですね。

## ―今回、10回の稽古と本番が3公演でしたが、本番まで長谷川さん自身、これは難しかったとか、悩まれたこととかありましたか？

正直ほとんどなくて、最初、コミュニケーションをどうやってとれば良いのかと思いましたが、手話通訳の方も常に帯同してくださいましたし、まったく不安はなかったです。むしろ、みんな勘が良かったので、こちらが意図することを読み取る力が長けていました。作品づくりの進行やリハーサルの進行も普段より早かったので、とても助かりました。あと、音楽が聴こえないメンバーから、音が聴こえないことに対して表現のアプローチをどうすれば良いのか悩んでいたことを聞きました。確かに、例えば悲しいメロディーなどが分からない人たちに、音楽のイメージ、こういう物語だからこう表現してほしいとちゃんと言葉で伝えなければ伝わらないということに気づかされました。

## ―今回作品を作る前と後で、ご自身で何か変わられたことはありますか？

ダンス表現を追求していった時に、技術を追求しながらも一番大事なことは独自性だと思うようになってきたんです。今回、障害のあるみなさんと一緒にやっていると、障害という身体的機能が劣っているというイメージを持たれる方も多いと思いますが、実は、そうではなく個性として存在していて、特に今回のイベントで海外の方たちも障害をオリジナリティのある表現に変えているなあと。それは素晴らしいなと思いました。輝いているみなさんを見てると嬉しく思いましたし、逆に悔しいとも思いました。独自性を求めてDAZZLEというスタイルを作って、いかにみんなができないことをやってやろうとか、これが長谷川達也だという踊りを作って表現し追求してきたのに、存在感とパフォーマンスで適わないなあと思いました。「なんだ俺がやってきたことは普通じゃん」と悔しく思いましたね。

## ―公演でステージに立った時にみんな緊張していましたね。本番前に円陣になって声をかけていただいた時にすごく嬉しかったとみんな言っていました。

本当ですか？

## ―みんな一体となって、一つのものを作るという実感が湧いたようです。

DAZZLEではいつもやっているんです。

## ―長谷川さん自身、今回の経験を通じて今後やってみたいことや目標はありますか？

DAZZLEの舞台活動をずっとして今年で22年目を迎えたんですけど、もっともっと追求して良いものを作っていきたいとは常に思っています。日本での公演もそうですし、海外での公演もどんどんやっていきたいです。演劇祭に招かれて表現しに行くこともあるし、自分たちでもパフォーマンスを作りに行くことも考えています。今回、障害のあるみなさんと一緒に作品を作ってきたことで、2020年の東京オリンピック・パラリンピックでも表現というところで、またみんなと一緒にやってみたいなと思いました。

## ―最後に、BOTANに対してメッセージをお願いします。

一緒に作ってきて長いようで短い時間でした。このシンガポール公演は一応ゴールではあるんですけども、彼らにとっても僕たちにとっても、ダンス人生、表現者としての人生はまだまだ続いていくものなので、この経験を糧にでもっとレベルアップをしてもらいたいですし、良い表現者になってもらいたいなと思いました。

## ―ありがとうございました。

▶BOTAN x DAZZLEの稽古場レポートは [こちら](#) からご覧いただけます。